

学位論文審査の結果の要旨

令和 4 年 12 月 2 日

審査委員	主 査	木下 博之 (印)		
	副主査	舩形 尚 (印)		
	副主査	平尾 智広 (印)		
願 出 者	専攻	医学	部門	(平成27年度以前入学者のみ 記入)
	学籍 番号	19D733	氏名	浪尾 敬一
論 文 題 目	Relation between Prolonged Sedentary Bouts and Health-Related Quality of Life in Patients on Chronic Hemodialysis			
学位論文の審査結果	<input checked="" type="radio"/> 合格	<input type="radio"/> 不合格	(該当するものを○で囲むこと。)	

【要旨】

【はじめに】

慢性血液透析患者は増加傾向で、適切な予防、改善が必要とされている。「臥位または座位における1.5メッツ以下のすべての覚醒行動」と定義される座位行動は、さまざまな健康アウトカムの危険因子として認識されている。我々は以前から、慢性血液透析患者において座位行動 (%) が健康関連QOL (HRQOL)、死亡と関連することを報告した。さらに、近年、座位行動の質 (連続した座位行動バウト) が健康アウトカムと関連することが報告されている。しかし、慢性血液透析患者において、連続した座位行動バウトとHRQOLとの関係についての報告はいまだない。

【目的】

慢性血液透析患者における連続した座位行動バウトとHRQOLとの関係を明らかにする。

【方法】

2013年9月から2019年9月までにA病院で外来で慢性血液透析の治療を受けていた208名のうち、3軸加速度計を用いた身体活動量および連続した座位行動バウトの測定と、HRQOLの指標であるEuroQoL (EQ-5D) 調査、書面によるインフォームドコンセントが得られた84名 (男性42名、女性42名) を対象とした。連続した座位行動バウトの指標として、30分以上と60分以上の時間 (分)、バウト数 (bouts) と装着時間に対する相対値 (%) を用い、HRQOLとの関係を単回帰分析、重回帰分析により評価した。

【結果】

単回帰分析で、全日および非血液透析日において、すべての連続した座位行動バウトの指標はHRQOLとの有意な負の相関を示した。重回帰分析でも、全日と非血液透析日において交絡因子で補正した後でも、すべての連続した座位行動バウトの指標はHRQOLの決定因子であった。

【結論】

慢性血液透析患者では、特に非透析日で連続した座位行動バウトとHRQOLとの有意な関連を認め、連続した座位行動バウトの減少がHRQOLを改善させる可能性が示唆された。

【審査要旨】

本研究に関する学位論文審査は、令和4年12月2日に行われた。

本研究は、慢性血液透析患者において、連続した座位行動バウトとHRQOLとの関係を初めて検討したもので、非透析日において連続した座位行動バウトを減少させることが慢性血液透析患者のHRQOLを改善させる可能性を示した。本研究で得られた成果は、慢性血液透析患者の生活習慣改善支援の在り方を示すものとして学術的に価値があると考えられた。委員会の合議により本論文は博士（医学）の学位論文として十分に値するものと判断した。

審査会においては、

- 1) 実際の座位行動の時間とバウトは正規分布しているデータなのか。
- 2) 併存疾患の影響はどうか。
- 3) 筋力、サルコペニア、フレイル等の検討はしたか。
- 4) 腹膜透析などでは拘束時間が少ないが、座位行動等に影響してくるか。
- 5) 座位行動におけるバウトとはどういう意味か。
- 6) 単回帰分析の結果を散布図等で表したものはあるか。
- 7) 脱落の要因はなにか。
- 8) 測定未完了者が多いが、測定完了者と違いはあるのか。
- 9) 非透析日での座位行動が多いことが問題という結果だが、具体的にどう改善したらよいか。
- 10) EQ-5Dとは具体的にどのようなものか。

など多数の質問が行われた。申請者はいずれも明確に回答し、博士（医学）の学位授与に値する十分な見識と能力を有することが認められた。

掲載誌名	Acta Medica Okayama 第76巻, 第2号		
(公表予定) 掲載年月	2022年4月	出版社(等)名	Okayama University Medical School Okayama, Japan

(備考) 要旨は、1,500字以内にまとめてください。